

101. 壬申の乱における 三尾城の所在をめぐって

はじめに

671年12月3日、天智天皇は自ら造営した大津京において没した。翌壬申の年6月24日、かねてより皇位継承を望んでいた天智の弟・大海入皇子は吉野離宮を脱出、東国に走って兵を挙げ不破関（現・岐阜県関ヶ原町）より近江に進入、大津京を攻撃した。7月22日、ついに近江朝廷は瓦解し、大友皇子（天智の子）は自殺した。

同日、大海入軍に降っていた近江の有力豪族羽田公矢国は、出雲臣伯と共に西近江路を南下、近江朝廷側が守備していた三尾城を陥落させた。

これが壬申の乱における三尾城の存在を示す唯一の記述であるが、これによって三尾城が大津京の北辺防備の一翼を担っていたことが想像される。

それでは当の三尾城はどこに構築されていたのであろうか。

今回、「湖西の歴史探訪会」のメンバーが行ってきた、高島郡安曇川町・高島町および滋賀郡志賀町に及ぶ踏査活動によって、その概要を把握し一定の成果を得ることができたということを報告したいと思う。

経過

湖西の歴史探訪会では、55年度は高島郡内の「城」をテーマに調査活動を行ってきたが、特に『日本書紀』に記載されている三尾城の存在に注目してきた。

とりわけ壬申の乱における三尾城の守将の一人であったと思われる三尾氏が、6世紀においては継体天皇を輩出するほどの有力氏族であったことや、朝鮮文化の強力な影響を受けていたという多くの事実から推して、早くから古代山城を構築していた可能性があった。

加えて、665年天智天皇は、唐・新羅の来襲から大津京を守備するために長門城・

大野城・基肆城を百濟系の渡来人に技術指導をさせて築造させている。

この3城を含んでほぼ同時代に築かれ、『日本書紀』『続日本紀』に城名の登場する古代山城13城が、すべて朝鮮式山城であったと言われていることは、三尾城の構造を推定するうえで大いに参考になるであろう。

もう一つ三尾城の存在意義と築造年代に示唆を与える歴史的事件がある。668年7月、高句麗の使者が大津京を訪れている。内部的分裂で弱体化した高句麗が唐・新羅との抗争において、近江朝廷に何らかの援助を期待してきたものと解されるが、その使者は日本海



第1図 三尾城遺構地点図

を南下し北陸路から大津京へ入っているのである。この事実から考えても、当時の朝鮮半島あるいは大陸側から大津京へ来るのに、三尾の地（安曇川町や高島町）を通るルートがしばしば利用されたものと思われる。このことから三尾城が大津京の北辺防備に関して、最終的拠点としての重要な位置づけをされていたと言えるだろう。

以上のような諸条件をふまえたうえで、三尾城が三尾氏の本貫地内に築かれた、いわゆる朝鮮式山城もしくはその影響を受けている城郭であり、その後天智期に勅命をもって本格的な改築をされた可能性が大であると考へた。

次に三尾城の所在地を確認調査するにあたってたてた仮説、つまり候補地の選定理由は次のような条件を含んでいた。

- (1)古代山城に共通した特徴として、標高 300～400 m の主峰上においてその外郭線が数kmに及び、複数の谷を抱えていること。さらに三尾城に必要な条件、つまり西近江路の要衝にあたり、北方より侵入する敵軍の行動が俯瞰できる位置にあること。
- (2)石塁または土塁が山腹や尾根上を走り、その塁線の要所には水門石垣や城門の遺構が存在し、城内には礎石群または掘立柱群による軍営倉庫等を設けるだけの平坦面が確保されていること。

そしてこれらの諸条件を充たし得る地形、それは高島町勝野の南東に位置し、二等三角点 517.3m を包摂する比良山系の山地上において他にありえないものと思われた。

位置

昭和55年、何回かの踏査活動を行った結果、山中の各所に大小の石を人為的に集積したと思われる場所を見つかることができた。

それらを地図上におとしていくと、517.3m（通称見張山）の二等三角点を中心にして2kmの円を描き、中心より東側半円部にはばすすべての遺構が収まることが解った。つまり音羽の蓮谷寺の裏山より出発して、鶴川に至る馬蹄形の外郭線（標高 150～200m）と、前述の三角点の存在する尾根上を最高点とする間に、各種の遺構が散在することになる。

見張山の頂部へは、音羽・天眼山南方の谷、勝野の見張谷、打下の谷尻谷、そして鶴川の出山谷を登る4本のルートがあり、いずれも標高 340m 辺りの平坦部で合流した後、西方尾根道を一気に三角点に達することになる。

そしてこれら4本のルートは、いずれも深い谷を通過して山頂に至るもので、一般的に複数の谷を抱く古代山城の立地条件とも照合するので

ある。

見張山の頂部からの眺望はみごとである。北方にはかつての西近江路が北上しその後方はるかに福井の山嶺が遠望できる。東方眼下には三尾崎と琵琶湖の青い水面がせまり、湖東平野や伊吹・鈴鹿の山脈まで一望できるし、南方にはやはり西近江路が湖岸沿いに大津方面へと続いている。

この位置からであれば、北方からの敵軍の侵入を早く察知し、¹⁵⁰ 烽等の手段を用いて大津京方面へ連絡をとるのも容易なことであったと思われる。

遺構

三尾城の遺構中もっとも注目されるものは、音羽の蓮谷寺裏(図版、A・1点)から始まって勝野の日吉神社、打下の白鬚神社の裏山を通り、鶴川(A・2)に達する石塁である。

この7km以上に及ぶ石塁は、平均幅が80cm、最大高が3.4mの規模をもって標高 150～200mの山腹を圍繞し、ほぼ馬蹄形の塁線を形成している。

今まで、この長大な石塁が人々の注目を浴びなかったのはシシ垣説に原因がある。つまり山中の猪や鹿が、里の農作物を荒しに来るのをロック・アウトするために造られたと言われており、江戸時代にシシ垣を造ったと伝承されてきた。

しかし、シシ垣の一般的な形は、山すそにそって濠を掘るか、木柵や板等を巡らす方法が用いられており、まれには30～40cm大の石をせいぜい1～2m位に積み上げた石塁で、集落全体を包圍する例があるぐらいであろう。

まして所によっては、人家や耕地より1km以上も離れた山中を、無数の尾根や谷を横断しながら延々7km以上におよぶ石塁の構築にあたり、江戸時代2万石の小藩(大溝藩)に、猪や鹿の害を防ぐだけの目的で領民を大量動員するだけの力があつたのだろうか。

しかも音羽以西で最も猪や鹿の出没する可能性の高



第2図 見張山より西近江路を望む

い地域にこの種の施設が無いのも矛盾している。そこでこの点について、県の自然保護課や畜産課に問い合わせた結果、両者とも構造・規模の両面からシシ垣説に疑問があるという解答を得た。

確かに石塁の構造上から考えても全面的シシ垣は排除されるべきである。まず第一に、使用されている石材が巨大なことに目を見張る。土中に埋置された基底石や地表1～1.5m部分においては1tを越えるものが随所に見られ、谷底部では数10tにおよぶ巨岩を利用して水門石垣(A・3)を構築している。また、石塁のほぼ中間より上層部では、20～40cm程度の小さな石が野面積みされており、下層部の1mを越える石材を多く使って整層傾向を示しているのに比較して大きな差異が見られる。さらに朝鮮式山城に特有の通水口(A・4～A・6)を下部に設けた水門石垣もあり、それらは基肄城水門遺構等に類似した、古墳の横穴式石室の石積み工法と同じ形態が見られる。

しかもA・4通水口には水道で連結する水源池遺構が残存し、A・5とA・6の通水口ではその内法の高さ・幅ともに50cmを越える規模であり、中型ぐらいの猪なら通過可能な構造となっている。

したがって以上のような諸条件をもって総合的な考察をすると、これら石塁(特に基底部)は当初三尾城の外郭線として構築され、防備のための木柵の根止めか、土築防塁の芯部として用いられたものであったが、



第4図 めくら水門(B3地点)



第3図 水門石垣と通水口(A4地点)

近世に至ってシシ垣に修復転用された可能性がある。
他方、三尾城が北方からの侵入者に対する防備を第一義的に考慮して、構築されたものと思われる遺構群が存在する。

音羽の天眼山頂(188m)への登山路に直交して走る外郭石塁線の下方に並行する形で、5～10段の帯郭状石積平坦面(B・1～B・2)が観察される。また水門石垣(B・3)や「折れ」を用いた虎口状石積遺構(B・4)、B・5～B・6地点ではA地帯とは別途に河岸段丘上や谷の斜面を縦横に走る石塁線もあり、等高線にそって東西600m以内に各種施設の集中傾向がみられる。城の大手としての機能と共に、北方に対して偉容を誇示する配慮がうかがえる。あるいはまた、水尾神社の縁起に三尾氏の祖として登場する磐衝別が、三尾山の麓に居住していたという伝承から推して、三尾氏歴代の居館が三尾城を背後にして群立していたと考えることはできないだろうか。

広範囲に散在する遺構の中で、なお比較的まとまりを見せている場所がある。

標高300mのレベルより尾根を伝って、見張山の頂部へ達する途中にも、後世設けられた砂防堤とは区別できる遺構(C・1)が存在する。尾根の北斜面に3mを越す岩が露出し、それと一体化した形で高さ60cmほどの風化した石垣が、4mばかり残存している。

さらにその石垣に接続する尾根上には、人頭大から数mに及ぶ多数の石材が人為的に集積されたと思える箇所があり、城戸口か門壁が崩壊した状態を思わせる。

さらに尾根道を登ると三角点に到達する。その前後200mぐらいの範囲に、断続して土塁(C・2～C・3)が築かれている。それらは尾根の起伏に対して、隆起部は切り通しを施し、鞍部には頂部幅員1m、高さ1～1.5mの土塁を構築して通行の円滑をはかった形跡であり、望楼から山腹の司令所への連絡路の痕跡と考えられる。そして小規模ながら、その形状は大野城の土塁線を彷彿させるものがある。

また馬の背状になった尾根を西に向かうと、C・6地点には貯水槽を思わせる矩形の石列や、望楼等の立地条件を充たす地点(C・4～C・5)もある。

しかし、落城後に受けた破壊活動が激しかったのか、今一つ確証が得られないままに、57年3月調査に一応の区切りをつけることにした。

まとめ

朝鮮式山城の分類は、その使用する石材の差や圍繞石塁線の形態によって、「瀬戸内型」「九州型」「包谷型」「鉢巻型」「傾圜型」等の呼称が用いられてきたが、三尾城の場合そのいずれにも適合する構造ではないように思う。

城郭線はほとんど山裾を巡って馬蹄形を形成してお

り、その規模においても大野城の全周8.6kmに次ぐ長大なものである。

しかしそのことは当然ありうることであり、北九州や瀬戸内諸城のような立地条件とは異なる内陸部、それも畿内にあつて西近江路を制圧するという使命を担って構築されたものである。陸路を制圧するために必要な防禦線が低位置にあるのは、水軍の侵入を威圧し最終的には「逃げ込み城」として機能するために必要なレベルとは異ならなければならないだろう。

また歴史的な変遷の過程もその構造上の差異を生じているように思う。つまり6世紀以前、すでに朝鮮文化の影響を強く受けていたと言われる三尾氏にとって、軍事面でも何らかの影響を受け、自己防衛のために古代山城を築いていたという可能性は高い。加えて、中大兄による大津京遷都と共に国家的使命を課せられることになり、大規模な朝鮮式山城へと改造することになったのではないだろうか。

三尾城がどの年代に築かれ、具体的にはどのような縄張構造をもっていたかを知るには、より詳しい調査や遺物の採集結果を待たなければならない。そこで今後の研究上不可欠と思われる課題について列記するならば、

- (1)外郭石塁線の全域踏査と構造の解明。
- (2)礎石群建物や城門跡の発見と遺物の採集。
- (3)年代決定の好資料となるであろう門礎等の発見。
- (4)文献資料の発掘による史的裏づけ。
- (5)古歌に見える三尾山(三尾の柚山)の所在地の解明と、三尾城との関係の調査。

以上5点があげられるだろう。

また今回の調査結果について、京都大学の上田正昭教授より寄せられたいくつかの貴重なアドバイスを紹介し、この稿を終りたいと思う。

- 今回の比定地が、現時点では三尾城であるとは断定し難いが、その可能性は十分にある。
- 三尾城が、『書紀』に記載され壬申の乱の舞台となった城として歴史的に重要であり、かつ大津京北辺の防備として築かれた可能性が高い。
- シシ垣に水門はありえないだろう。水門遺構に連なる水道を辿って、水源(溜池)を確認すること。……その後の調査で保存状態の良好な水源池を容易に発見することができた。
- ポイントをおさえたい学術調査が必要。たとえば水門と石垣下部、また嘉祥2年(849)創建の長法寺や永正年間同地に存在した中世山城と三尾城との複合関係など。
- 三尾城が占める位置は、陸路(西近江路)だけでなく湖上交通の要衝という観点からも考えてみる必要がある。(石田 敏)